

平成 28 年度第 1 回富山県環境審議会環境教育小委員会議事概要

1 日時

平成 28 年 11 月 22 日（火） 午前 10 時から 12 時まで

2 場所

富山県民会館 401 号室

3 出席者

委員：江田明孝委員、楠井隆史委員、志村幸光委員、茶木勝委員
古川尊久委員、本田恭子委員、松本謙一委員、水上庄子委員
宮原美充委員、湯浅純孝委員

事務局：山本生活環境文化部長、杉田環境政策課長ほか

4 内容及び結果

（1）委員長職務代理者の選任

楠井委員長が、富山県環境審議会運営規程第 9 条第 7 項の規定に基づき、委員長の職務代理者として、湯浅委員を指名した。

（2）議事

・富山県環境教育等行動計画（仮称）の策定について

事務局が富山県環境教育等行動計画（仮称）の策定趣旨等を説明した。

・富山県環境教育推進方針の実施状況について

事務局が富山県環境教育推進方針の実施状況について説明した。

・富山県環境教育等行動計画（仮称）の骨子案について

事務局が富山県環境教育等行動計画（仮称）骨子案について説明し、了承された。

・今後の進め方について

事務局が富山県環境教育等行動計画（仮称）策定スケジュール（案）について説明し、了承された。

5 主な意見・質疑応答

[委員]

アンケートで「学校で指導時間がない」という回答が多いことについては、学校は 4 月に年間のカリキュラムを決めてしまうことが大きな要因ではないか。総合的学習の時間についても、4 月に年間のカリキュラムを決めてしまう。カリキュラムを決める時期にうまく情報が入って、かつ教材があるとうまく取り込めるが、カリキュラム決定後に情報が入っても計画に追加しにくく、指導時間がとれないということになる。4 月にうまく情報を提供できる仕組みがあると良い。

[委員]

ESDがここ10年で多く取り上げられている。ユネスコスクールが少しずつ増えてきている。環境については、先生方の意識が重要である。学力重視ばかりでなく、あたたかい子どもに育つように環境教育も大事である。富山県は他県に比べると進んでいると思う。しかし実践していこうとすると難しいところがある。

イベントなどに参加する人はもともと意識が高いが、本来「来てほしい人」に来てもらえるように“巻き込んでいく”ことが大切である。

ユネスコスクール加盟校が全校集まり、ESD講座を開催、子供たちが発表する形をとるなど、積極的な面もみられる。

[委員]

学校では環境について授業でしっかりやってもらっているが、活動のための時間がなかなかとれない。

ユネスコスクールで小学校は「ESDボランティア手帳」の配布がある。

県生涯学習・文化財室で配布している「ボランティアパスポート」が有効に働いた事例として、老人クラブが毎週歩くのと併せて学校の生徒がごみ拾いをし（ボランティアポイントが付くので子供たちは自主的に参加）、また、子供が休日に出かけるので親たちも参加するというものがある。

ボランティアポイントはユネスコスクールで実施し、認定証受領のときに、関係者の方からお話をいただいている。

[委員]

PTAでは、環境教育については、喫緊の課題としては上がっていない。

課題に取り組むには親子のコミュニケーションが大事で、子が学んできたことを親が聞いてやること、親も関心を持つことがとても重要である。

[委員]

「親子で森遊び」などの企画を実施しているが、これは、親への教育が必要であると考えられているためである。振り返り時間を多くとるようにしているが、最近、このような行事が少ない。親子のふれあいが大事であると思う。

アメリカでは、学校菜園、学校田、食育を兼ねた、エディブルスクールヤードという新しい動きが出てきている。空き地で自然栽培をされている方々と一緒に生き物などについて観察するなど、ESDでも取り入れられると思うが、これも環境教育の一つである。

[委員]

自然観察会の参加者は小学生から大人まで、年代の幅が広い。自然観察会を通して地球温暖化、外来植物の話をしたりしている。立山では、外来植物の除去活動を行っている。企業団体、県立大の学生にも参加していただき、自然を紹介しながら自然への理解について話している。

[委員]

ネットワークづくりが大事である。愛知、三重、岐阜、長野と北陸 3 県の方々といろいろな取組みをしているが、情報の共有が大事である。

ESD に関しても自分が関わっていない分野に目を向けることで、そこに問題解決のヒントがあつたりする。

協働ということは、環境に限らず、重要である。

コーディネートしていくための中間支援組織については、北陸 3 県が弱い。

教育のツールとしてカードゲームを通して ESD の考え方で学ぶというものがある。体験で学ぶ方が、セミナーを聞くより身に付くということがある。

[委員]

イベントなどで、NPO や、児童、生徒に参加を促しているのだが、興味のない人たちにも参加を促すことや周知することは困難であることが多い。実際の体験で、へびを見せるなど、興味を持ってもらえるような工夫をしている。

親や先生が興味を持つと児童も興味を持つ。幼児期に環境教育の機会を持つことが大事である。

[委員]

協働の取組みについて、5月の市民宣言を実現するために、環境に関心のある団体とみんなをつなぐネットワークとプラットホームづくりを実現したい。とやま環境財団は中間支援組織であるが、県とほぼ同じである。市民や民間の組織が中心となった仕組みが必要であると痛切に感じている。広く浅くの広報ではなく、興味をもつ人、団体を繋げていく協働の取組みが必要である。

[委員]

ねいの里は環境教育の拠点として設立されたものであると聞いている。ナチュラルリスト養成には必ず利用している。県の中心にあり、交通の便もよい。

ナチュラルリスト認定者は 700 人を超えている。実際活動しているのは、380 人である。施設を充実して活動の拠点となるよう検討していただきたい。

[委員]

環境教育を進めるには、教育委員会との連携を取りながら進めてほしい。県教委の「指導の重点」等に取り入れていただけるなどの、協力が必要である。